

はじめに

今年の春のこと、大学院の非常勤講師の仕事で市ヶ谷に向かうとき、北朝鮮のミサイル発射のニュースを受けて、東京メトロが運転見合わせになった。

現実感がなかった。出来の悪いB級映画の世界にふと迷いこんだかのように思った。その日の講義では、中国の留学生たちとともに、押井守の『機動警察パトレイバー2 the Movie』（一九九三年）の映像を観たのだった。映画の中では、戒厳令が敷かれ、東京の中心に戦車やヘリが行き交う。それでも普通に学校や会社に通う人々。日常の光景がそのまま、マジカルな祝祭のようになっていく。戦争と平和、現実と虚構の、何重ものねじれ。けれども、映像の外側にある私たちの現実は、魔法のように美しいものではなく、どこか滑稽で、嘘っぽくて、出鱈目だった。

東京メトロはその後、Jアラート（国の全国臨時警報システム）の作動時のみ、車両の運転を見合わせると発表した。そういえば二〇一五年の春、石垣島や竹富島、西表島など八重山諸島を家族で旅したときも、ミサイル発射の知らせがあって、島民や観光客の携帯やスマートフォンが一斉に鳴りはじめた。水上バスからP A C 3（地上配備型地对空誘導弾）の影がみえた。島の住人たちは諦観や静かな怒りを込めてそれら

を笑い飛ばしていたけれど、ひるがえって、虚構のテロや戦争を怖れる東京近郊の私たちはどうだろう。私たちの薄ら笑いには、腹からの哄笑の力がなく、不健全に気の抜けたガス漏れのようなのだ。

その後、北朝鮮のミサイル報道も常態化し、Jアラートもすっかり馴染み深くなった。しかしそれらは現実の米朝開戦時の国内の被害や死者数を冷徹に計算するようなりリズムを欠いていた。B・29に竹槍で立ち向かうのと大差ない。これはどこまでが現実であり、どこまでが妄想やマンガやアニメの世界の話なのだろうか。何より、現実と虚構のメビウスのなねじれを論じる言葉自体が、どうしようもなく薄っぺらく、手応えがなく、現実の核心を捉え損ねていると思えた。

*

本書『戦争と虚構』は、時評的な性格が強い。より正確にいうと、作品論的な批評と社会時評（状況論）の中間的な形という感じだろうか。目の前の作品にまっすぐ対峙する。底の浅い皮相な解釈で事足りれりとするのではなく、あるいは状況の地図を小器用にチャート化するでもない。一つの作品の深みへと沈潜していくこと。沈潜していくことによって、時代の空気を捉え、今現在の総体をも記録しようとする。暗中模索の道だから、そこに正解はない。のちに振り返ったら、現実や正解からは遠く離れているかもしれない。そのような意味で、本書は時評であらうとし、時評的な批評集であらうとした。私にとってはじめてのタイプの本になる。

二〇一〇年代という一〇年間、どんな時代なのだろうか。

二〇一〇年代の前半は、東日本大震災と福島第一原発公害事故の「後」の混乱した時間だった。未曾有の災害があり、破局的な現実があり、無数の傷やトラウマがあった。戦後のな価値観の基礎を決定的に揺さぶられた。そしてその震災後の空気が、徐々に、近い将来にやってくるだろう破局的事態の「前」の空

気へとスライドし、地滑りしつつある。そこにあるのは新たな「戦前」——その場合の「戦争」が何を意味するかはいまだ不透明であるとはいえ——の空気であり、災厄の予兆に満ちた気配である。

そうした不穏な殺伐さを覆い隠すために、二〇二〇年開催予定の東京五輪が未来の輝かしい「ニッポン」東京」のエンブレムとして強調され、北朝鮮や中国の存在が「外敵」として扇情的に名指され、日本国憲法の改定が究極目標として設定される。何かが根源的に崩れ落ちようとしている。

「後」と「前」の時間感覚が混在する二〇一〇年代という時代。つまり本書は、震災後から新たな戦前へという転換期のディケイドをめぐる時評集である。

本書の半分以上を占めるI章の「戦争と虚構——『シン・ゴジラ』君の名は。』この世界の片隅に』『ガラム・ウォーズ』（書きおろし）では、二〇一六年に一斉に公開された、この国の文化的な歴史を更新するような（広義の）アニメーション作品たちを論じている。驚くほどの傑作が出揃い、それが矢継ぎ早に繰り出され、流星群のように次々とやってくる。二〇一六年は、そんな奇蹟の一年だった。そのディープインパクトを受け止め、批評の言葉によって食らいついでみなかった。

I章「戦争と虚構」は、構成その他から、『シン・ゴジラ』『君の名は。』『この世界の片隅に』『ガラム・ウォーズ』という価値序列があると思われるかもしれない。しかし、よく読んでもらえれば、それほど単純な構成にはなっていないはずだ。むしろ各々の作品が緊張感をもって対立し、不協和音を奏でながら、互いを弁証法的に高めていく、そうした構造を意識している。どんなに批判的で辛辣に見えても、そこには、現代文化の土壌に対する根本的な肯定の気持ちがあり、否定や批判を通じた愛があるはずである。後半のII章～V章として収録した四つの文章は、近年、文芸誌の『すばる』『新潮』に掲載した批評文から、時評的性格の強いものを選んだ。本書はII章がいちばん新しく書かれ、V章がいちばん古く書かれている。それらを発表順の逆に並べた。書き下ろしのI章をあわせて、時間を遡るような構成になっている。

る。全体を読み返してみると、私自身にとっても意外なほど、近年のモチーフには連続性があった。

この国の近代化／戦後が強いインパクトに對峙し、それを継承しながら、芸術と政治、消費と倫理、戦争と平和の狭間を縫っていくこと。私たちの生の欲望を更新し、新しい人間になっていくということ。人類が積み上げてきた技術や知識に感謝しながら。そのような連続的なモチーフがあった。日本の近代化の限界を超え、戦後の理念の限界をさらに超えていくとは、どういうことだろうか。新たな国際社会／東アジアの平和にふさわしい人間になっていくとは。

ただしそれは、戦後の理念やリベラルな価値観をリセットして、国際平和に貢献する自称「積極的平和主義」(じつは対米従属を強化するためのスリップストリーム型軍事国家主義)を声高に主張する、ということではない。むしろ、戦後のものの矛盾と欺瞞を率直に認めながら、戦後というぼろぼろの理念を継承し、継ぎ接ぎし、それを蘇生して、この国の未来を見つめていくことである。理念と現実、瓦礫と悪夢のあいだを縫いながら。くよくよしたり、ふらふらしながらの、頼りない弱虫の歩みであつても。

それならば、平和にとってフィクション作品とは何か。

虚構は戦争に抗することができるのか。

そういうことを愚直に考えてみたかった。

こうして一冊の本にまとめることで、それぞれの時局のもとで書いた原稿に、星座のように新しい意味が生まれてくればいいと思う。

*

それにしても、状況の進み行きが想像以上に早く、悪い。II章以降の原稿は、当時はかなり不穏なことを書いたつもりだったが、今読み返すと、現状から決定的に遅れており、まだまだのんきで、牧歌的な感じすらしてしまう。五感をとぎすませて、時代の空気に沈潜することで、ありうべき最悪の道筋を先取りし、それに抵抗するための道を発見する。それが時評の意味だろう。もうまもなく、というか本書が刊行される頃には、本書で書いたような事柄が、夢のように美しくありえた時代の証言に感じられているのだろうか。

暗い時代である。暗すぎる、と言ってもまだ足りない。しかし、破局的な危機の時代においてこそ、人類の芸術や思想、批評はその力を発揮してきた。そうやって未来の人類を豊かに底上げしてきた。今後もしていくだろう。ファシズムや全体主義や独裁体制が永続した時代はなかった。極右化やポピュリズムだつてそうだろう。近代化やデモクラシーや平和思想はこの地球上で少しずつ陣地を増やし、低い眩きによって勝利し続けてきた。それを忘れないことだ。政治的人間であらざるをえないときにこそ、芸術的人間でもあらうとし、生活をよりよきものたちで満たしていくことだ。

来るべき戦争や災厄や破局が実際にどんな形をとるのか、それはまだはつきりとはわからない。かつての全体主義やファシズムや軍国主義の反復となり、戦前回帰になるのか。もっと別の、予想外の異様な形になるのか。日々の暮らしの中で想像力をとぎすましていくしかない。

なだれおちていく時局に對する戦いや抵抗の形も、政治的かつ芸術的なフィクションのあり方も、自己と社会を同時変革していくための道も、何もかもが手探りであり、五里霧の中であり、私たちは時代の空気と泥沼の中を生きながら、粘り強く試行と錯誤、暗の中と模索を続行するよりほかにない。

実際、今こうしているあいだにも、北朝鮮とアメリカの軍事的緊張が変転し、生々しく高まっている。何が起るかは少しもわからない。ふとしたことで何かのボタンが押されそうな、不安と狂気が充満した空気がある。国難や危機を煽るのは、政治不信や支持率低下から目をそらすために「敵」を捏造しているだけであり、情動的な政治広告であり、プロパガンダだ、でそれが片づくとは思えない。日米北のみなら

ず、韓国や中国、ロシアなどの利害も複雑に絡んでいるだろう。本書が刊行される頃に、戦争と虚構の関係を批評すること自体が無意味化しているのではないか、という恐れも正直消せない。だがそれでも、あるいはだからこそ。文化と虚構の力に賭けること。戦後の平和の矛盾を継承しつつ、日米安保体制（体系）を維持強化する自称「積極的」平和主義ではなく、友好的なアジア関係と普遍的な国際関係に基づき、新世紀の世界平和を目指していくこと。フィクションがその絶頂において平和のためになると信じること。今こそ。そして批評もまた。